

答えるや否や、腰が沈められる。太いゴムの輪っかをくぐり抜けるような肉感とともに、ズブズブツと膣内に男根が埋没してゆく。

ゴム膜を隔ててありありと肉壁の柔らかさが感じられる。男根の隅々にまで舌がへばりつき、蕩けたゼリーに漬けこまれているような、言葉には代えがたい快感だ。

(ああ、あつたかい……本当に、あつたかいんだ)

女のなかは温かいと、初体験の感想は幾度となく耳にしているが、実際には熱いと感じられる粘膜の火照りだった。

「ほら、入るよ……ん、んう、全部う、私のなかに……」

「はひっ、入ってくっ……うっ、ああ、あつ、入った!？」

太腿に尻が乗せられ、恥骨同士がぶつかり合う。

膣路を貫通した亀頭が子宮の壁にめりこむ。

「ああ、大きい、奥まで届いてる……いい、いくよ、動かすからね」

智代はすかさず腰を振りはじめた。ベッドに投げだされていた佳之の両手を乳房に導き、ゆっさゆっさとマットを軋ませて、童貞のペニスを愛しはじめる。

「うっ、ひっ! あ、おっ……ん、んっ!」

情けない嗚咽をもらし、右に左に身をくねらせ、フェラチオとは比べようもない激

悦に目を白黒させる。口で抜いてもらわなければ、今この瞬間にもスペルマをちびっていたらう、狂おしいばかりの快感だった。巨乳の揉み心地も、太腿に乗せられたヒップの弾力も、セックスの愉悦を増長させた。

絶頂を自覚せぬうちに、本日三発目のスペルマを薄ゴムのなかに垂れ流す。

それでも智代の腰はとまらない。久方ぶりの男性に、シリコンとは違う生肉の旨味に我を忘れ、射精している佳之にかまわず夢中で腰を振りまくる。

「はっ、ふうん……い、いいっ！ ああん、すごくいい……ほら、ほらあ！」

ギッチリと膣が締められ、萎える暇なく勃起が強要される。レイプまがいの荒々しさで肉棒がしゃぶり倒される。とはいえ、すでに三発も発射した今、多少なりとも我慢はできた。佳之は不慣れながらも自ら腰を使いはじめた。

「んいい、そ、そっ！ そうよ、動いて、ずんずん突いてえ」

「ああ、こうですか。これでっ、いいですか」

背骨を反らせるようにして勢いよく腰を跳ねあげる。女とは桁違いの馬力に満ちたピストンで、子宮を抉らんばかりに肉棒を突き刺す。

「おほおうっ！ う、うう……く、くうう！」

獣のごとき淫声で啼き喚き、身をのけ反らせる智代。



苦痛とも快楽ともつかない表情で、セミロングの髪を振り乱す。

グシヤ、グチュツ……ヌチャ、ヌチュツ……。

乳液混じりの愛液が膣から溢れだし、男根を抽送させるたび淫靡な音色が室内にこだまする。

(感じてるんだ、智代さんも……俺ので気持ちよくなってるんだっ！)

牝壺を貫くたび、美形が台なしの淫乱顔でよがり声をあげている若未亡人を前にして俄然やる気が出てくる。

「はっ、はっ！ いい、智代さん？ ほら、こうだろ智代さんっ！」

佳之は水風船のごとく上下に弾む巨乳をわしづかみで揉みまくり、ベッドのスプリングを軋ませながら肉壺を真下から串刺しにした。

「あう、はんっ！ ああ、ん、んんっ！ ダメ、ダメえ……い、ひっ……くうう！」

ついに一線を越えたのか、女体に緊張が走り、全身が小刻みに震えだす。

膣肉がうねり、膣の一枚一枚が痙攣し、膣の圧力が一気に高まる。

(イツてる？ ああ、イツてるんだっ！)

初体験でもわかった。智代は今明らかに頂点を極めたのだと。

もはや受け身ばかりでは物足りない。されているばかりでは満足できない。

佳之は性器を繋げたまま上体を起こし、女上位から正常位へ体位を入れ替えた。

「んっ！ あっ……だ、ダメえ、まだあたし、まだあ……うっ、んんんっ！」

「いい、ねえ……ほら、こうだろう？ こうだよね？」

アクメの揺りかえしに襲われている智代にかまわず、怒涛のごとく膣を串刺しにする。尻の穴に気合いを入れて、裏筋を引き攣らせつつ、がむしゃらに腰を振る。

「いつ、ひいい……くっ！ イクウ、また、またイツちゃう！ だめ、だめえ！」

「ああっ、すごい、すごいよ！」

連続のオルガスムスを極めた牝壺の旨味に、佳之もたまらずスベルマをちびりだした。それでも腰がとまらない。気持ちよすぎるとめられない。佳之は白目を剥いている智代の唇を奪い、巨乳を好きに弄び、気がふれたように男根をハメまくった。

智代はもう自分の女だと、この身体は自分だけのものなのだと、未熟な男にありがちな感情を芽生えさせて……。